

高等学校男子バレーボール指導者の指導のありように迫る —包括的コーチング・メンタルモデルの構築を目指して—

野口 将秀*, 遠藤 俊郎**

Approach to the truth for the coaching of high school men's volleyball coach:
Aiming to generate Comprehensive Coaching Mental Model
Masahide NOGUCHI*, Toshiro ENDO**

Abstract

The purpose of this study was to intellectual elaboration of approaches to inner knowledge and truth, with the universality widely in coaching science through the construction of a Comprehensive Coaching Mental Model by the one-to-one semi-structured, in-depth, open-ended interviewed to proven five high school men's volleyball coaches.

Analysis was performed by M-GTA (Modified Grounded Theory Approach). As a result, generated 115 pieces of 'Concept' from 96,521 characters of 'Talking', and generated 11 pieces of 'Category' from many 'Concept'. Moreover, generated 5 pieces of 'Category Group' from many 'Category'.

The generated 'Category Group' was respectively 'Roots of Coach', 'Coaching Philosophy', 'Concrete Coaching Behavior', 'Cultivation of Strength' and 'Expected upbringing personality'.

Finally, Comprehensive Coaching Mental Model of high school men's volleyball coach was generated.

Key Words: high school men's volleyball coach, Coaching Mental Model, M-GTA

キーワード: 高等学校男子バレーボール指導者 コーチング・メンタルモデル M-GTA

I. 緒 言

スポーツ現場における指導者のありようとはいかなるものであり、また指導者の有している知とはどのようなものであろうか。スポーツ現場において指導者は常に、時々刻々と変化するあらゆる状況に身を置きながらも適切な判断を繰り返し、チームや個人を目標とするところへと導いてゆくことが求められる。

指導者が状況を把握し行動を決定する枠組みは、「メンタルモデル」によって説明することができる。メンタルモデルとはもともと「自分なりに理解した、対象を捉える枠組みであり、心の中でもつ表象（イメージ）であり、それを操作することによって問題解決に使われるもの」（Johnson-Laird, 1983）と定義されている。このような概念は Côté et al (1995) によってスポーツの指導者に対しても適用可能であることが示され、「コーチング・メンタルモデル」と呼ばれている。近年ではそうしたモデルを構築することで、「指導者の指導観、指導意図、および指導行動の全体が明らかとなる」（北村, 2004）とされている。

北村ほか（2005）はエキスパート高校サッカー指導者に対するインタビュー調査を行い、指導者の指導に関する言及に局限して分析を行うことで、「熟達化」、「意識化」、「支援」という3つのカテゴリーの関係性から指導観や指導意図及び指導行動の全体を見出している。

こうした研究は、これまでの量的研究では迫れなかった個別具体のありように、質的研究法によって迫ろうとする重要な研究であるといえる。質的研究法とは、近年、心理学の分野で脚光を浴びるようになってきた方法である。これは人間存在という非常に複雑な対象を理解せんとする際に、従来の自然科学に基づく実証主義や客観主義などの量的研究では、どうしても取り扱えないような部分があるという認識が強まってきたために出てきたものである（Flick, 2002）。鯨岡（1999）は、量的研究は多くのデータを集め、その平均値を以って「標準的な人間」を想定し、知見を「普遍的なもの」として積み重ねていこうとするが、実のところ、その「標準的な人間」とは現実にはどこにも存在しない非常に抽象的な人間像に過ぎない、としている。また、量的研究は人々の個性やさまざまな出来事が起こる文脈といったものを、理想的実験状況に紛れ込むバイアスや標準からの誤差としてできる限り排斥しようとするが、実は人間存在の本質はむしろさまざまな個性や文脈

*: 京都大学非常勤 Kyoto University

** : 山梨学院大学 Yamanashi Gakuin University

(受付日: 2017年12月12日, 受理日: 2018年5月10日)

の中にこそ存するのではないか、という指摘をしている。

我々の存在は Benner and Wrubel (1989) の現象学的人間観に基づけば、我々の精神のみならず、身体もまた「知の担い手」であり、我々は「身体に根ざした知性 (embodied intelligence)」をもっている。ゆえにスポーツの指導者について考えるならば、長年に亘るスポーツ指導実践において感得された「身体知 (body knowledge)」や「経験知 (experience knowledge)」などの「内面知 (inner knowledge)」(大崎, 2007), およびその内奥に存する本人すら意識し得ない「暗黙知 (tacit knowledge)」(Polanyi, 1966) をも包含した豊饒な知こそ、今後のコーチング学およびスポーツ科学全般にとって非常に重要であり、そうした知を探求してゆく際に個別性に焦点化するということが欠かすことのできないものであるといえるであろう。

さて、そのように個に焦点化するための質的研究法の一つを用いて研究がなされたのが、前述のコーチング・メンタルモデルであった。しかしこれには、二つの問題点があると考えられる。一つ目は、語りが意味単位ごとに細分化され過ぎてしまい、本来指導者が語らんとした意味内容が捨象されてしまっているという点である。二つ目は、分析対象とした語りの範囲が指導に関する語りのみに限定されてしまうことで、指導者の背景的な知が抜け落ちてしまっている点である。指導者のありように迫るための質的研究法が、語りの意味単位を数値のような客観物として扱い過ぎてしまえば、その本来の目的とする質に迫ることはできない。また、指導者がこれまでに経験した事柄や、指導者そのものの人となりなどがあって指導というものが成り立っていることから、背景的側面にも目を向けなければならない。そこで、この二つの問題点を、分析の方法論的な観点から考察する。

先のコーチング・メンタルモデル研究において採用されていたのは、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach, 以下 GTA) という分析方法であった。これは、フィールドに密着して得られたフィールドデータをつきあわせながら帰納的にまとめ、現場の問題を解決するための有効な理論の発見を目指した方法論である。語りのデータを可能な限り細かく切片化してコード化し、共通の意味単位ごとにまとめてラベリングすることで、上位概念を作ってゆくものである。ここでいう切片化とは、語りを意味単位ごとに抽出することであり、それらに名称を付けることをコード化という。しかし、この方法では語りを短い意味単位で細分化してしまうという問題や、分析対象が局限化してしまうという問題がある。木下 (2003) は、従来の GTA の方法論的欠点を補う形で、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, 以下 M-GTA) という方法を提唱している。この方法では、語りが有している文脈性

を尊重している。切片化して最小単位にラベル化しないことで、文脈を考慮した意味の深い解釈を試みるということである。また、分析をまとめた後に個別事例の分析を行うことにより、個人のまとまりを崩すことなく個人からもたらされる豊富な語りを活用し、現実世界の理解につなげる可能性をも示唆している。このように、M-GTA は GTA と比較して語りの文脈性を重視し、より個別具体性に迫ろうとしているといえ、分析の際この方法を用いることで、より深く指導者のありように迫ることが出来ると考えられる。

II. 目 的

本研究では実績のある高等学校男子バレーボール指導者 5 名に対するインタビュー調査を行い、質的研究法の一つである M-GTA を用いて分析を行うことで指導者の語りの意味内容を捨象することなく人間存在を包括的に捉えたコーチング・メンタルモデルを構築し、指導者のありようやその内面知 (inner knowledge) に迫ると同時に、コーチング学上の一考察を得ることを目的とした。

III. 方 法

1. 対象者

本研究では、実績のある指導者を対象とするために、対象者を全日本選手育成経験者 2 名および全国大会優勝経験者 3 名の計 5 名の高等学校男子バレーボール指導者 (男性) とした。

各指導者の経歴はそれぞれ、指導者 A (68 歳, 指導歴 38 年, 全日本選手育成), 指導者 B (43 歳, 指導歴 20 年, 全日本選手育成), 指導者 C (55 歳, 指導歴 32 年, 全国優勝), 指導者 D (56 歳, 指導歴 31 年, 全国優勝), 指導者 E (51 歳, 指導歴 27 年, 全国優勝) であった。

2. インタビュー方法

簡単なフェイスシートおよび、1 対 1 の半構造的 (semi-structured), 深層的 (in-depth), 自由回答的 (open-ended) インタビュー法により実施し、本研究の趣旨を説明したうえで同意を得て、内容を全て IC レコーダーに録音した。インタビューは、2011 年 6~8 月の期間において、各指導者の都合に応じて、著者が直接出向き、主に体育教官室など落ち着いた空間で行った。なお、このインタビュー方法は、あらかじめ用意しておいた基幹的質問項目を軸に、語りに応じてさらに詳細な質問を行うことで、対象者の語りをより深く聞き出していくためのものである。本研究においては「指導者 (教員) を志した理由と就任当初のことについて教えて下さい」、「これまでの指導経験で、印象的な失敗経験があれば教えて下さい」、「ご自身の持つ指導観について教えて下さい」、「男女の指導における違いについて

の見解を教えてください」、「『勝負強さ』についての独自の
見解を教えてください」という5つの基幹的質問を用いた。
これらの質問項目は、指導者の持つ指導観や指導意図など
を明らかにすることを目的に、第一著者が独自に設定した
ものである。

3. 分析

得られたデータは逐語録としてただちに文字起こしを行
い、M-GTAに基づき、「語り」の解釈から『概念』を生成し、
『概念』を基によりまとまりのある〈カテゴリー〉を生成、
その後各概念間の関連性を考慮した[カテゴリーグループ]
を生成することで最終的に、包括的コーチング・メンタル
モデルの構築を目指した。「語り」から『概念』を、『概念』
から〈カテゴリー〉を生成した例を図1に提示する。

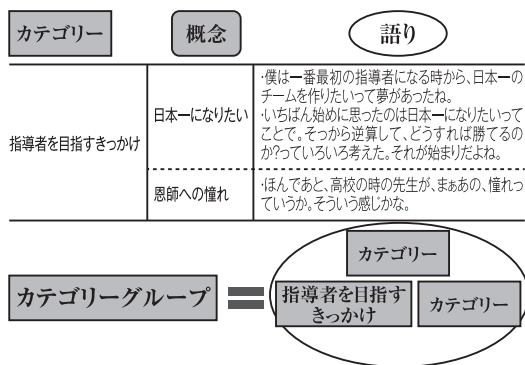


図1 M-GTAの分析過程の例

逐語録の分析は主に、バレーボール競技歴10年で、調査当時、大学男子バレーボール部でコーチとして指導をし、スポーツ心理学を学んでいる第一著者によってなされた。なお、分析の客観性を担保するため、スポーツ心理学に精通した共同研究者による妥当性の検証を行い、適宜論理的整合性を確認しながら分析を進めた。

IV. 結 果

高等学校男子バレーボール指導者5名に対する、総インタビュー時間528分53秒、総文字数96,521文字の「語り」の逐語録より、115個の『概念』を生成、それらを基に11個の〈カテゴリー〉を生成し、その後、意味連関を考慮した5つの[カテゴリーグループ]を生成した。得られた5つの[カテゴリーグループ]はそれぞれ、[指導者の根底]、[指導理念]、[具体的指導行動]、[勝負強さの涵養]、[育成したい人物像]であった。なお、以下ではそれぞれ「」で「語り」を、『』で『概念』を、〈〉で〈カテゴリー〉を[]で[カテゴリーグループ]を示すこととした。

以下に、「語り」から得られたいくつかの代表的な『概念』とそこから得られた〈カテゴリー〉、および関連性の高い〈カテゴリー〉を統合した[カテゴリーグループ]の一覧を

示す(表1)。115個の『概念』すべてを示すことは煩雑になるため、11個の〈カテゴリー〉を構成する際に重要であると考えられる代表的な32個の『概念』を表に示した。なお、『概念』の欄にある()内は、5名の指導者をそ

表1 高等学校男子バレーボール指導者の概念・カテゴリー・カテゴリーグループ一覧

カテゴリーグループ	カテゴリー	概念
指導者の根底	指導者を目指すきっかけ	教えることの喜び(B)
		指導者としてどこまでやれるか試したい(C)
		日本一のチームを作りたい(D)
	指導開始当初の葛藤と気づき	最初は自分が正しいと思っていた(A)
		盲目的(B)
		指導者と生徒の意識差(C)
指導哲学	指導者の人柄の中で(B)	
	挑戦しない失敗より挑戦して失敗(D)	
	指導者自身が勉強(E)	
指導理念	選手を取り巻く環境作り	周囲との連携(A)
		厳しいことを当たり前だと思う環境(C,D)
		包括的な環境(C,D,E)
	強制と自主	強制から自主へ(A,D)
		強制の中の自主(C)
	個性の涵養	バレー脳を見極める(E)
強い人間と弱い人間(A)		
	教え過ぎない(B)	
	一方的な指導はしない(E)	
具体的指導行動	技能の習得	意識的な行動から条件反射的な行動へ(A)
		意識的な行動から条件反射的な行動へ(A)成長するためのヒントを与える(B)
		まず全否定から(D)
	相互の関わり	目の輝きを見極めながら理論的に説明(A)
		答えを選手自身が見つけるための問い掛け(B,C)
		その時その時で変えていく(E)
状況への対応	状況を見極める(B)	
	誰にも負けないものを持つ(B)	
勝負強さの涵養	勝負の場面での心のありよう	勝ち負けを意識しない(A)
		勝負の場面を楽しめるか(D)
		挑戦者の気持ち(E)
勝負強さの源泉		強い人間と弱い人間のちょうど真ん中(A)
		我慢強さ(A,B)
		経験の積み重ね(C,D)
育成したい人物像		他人との比較ではなく、自分との戦いによって自己充実感を得る人物(A)
		感動を与えられる人物(B)
		自信を持って自己主張することができる人物(C)
		バレーが終わってからの人生をたくましく生きることの出来る、考動力*ある人物(D)
		人のことが考えられる人物(E)

()内は各指導者から得られた概念であることを表している
*指導者D特有の表現で、「自ら考えて動く力」のこと

れぞれ A～E として表したものである。

これら 5 つの [カテゴリーグループ] を基に、指導者が最終的な指導の目標として掲げている [育成したい人物像] を頂点に、指導を志した理由や指導開始当初の苦労や失敗とそこからの学び等に関する [指導者の根底] を底辺に据えた、包括的コーチング・メンタルモデルが構築された (図 2)。この図は、指導者の様々な〈指導開始当初の葛藤と気付き〉によって成り立つ [指導者の根底] を基底に、〈個性の涵養〉などといった [指導理念] が形成され、それに基づいた [具体的指導行動] が生み出されていることを表している。また、[具体的指導行動] が目指しているのは競技力の向上や [勝負強さの涵養] であると考えられるため、その上部に位置付けた。そして最終的に、[育成したい人物像] を指導の最終目標として頂点に据えた、包括的コーチング・メンタルモデルとなっている。

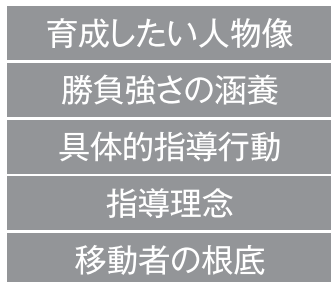


図2 高等学校男子バレーボール指導者の包括的コーチング・メンタルモデル

V. 考 察

【包括的コーチング・メンタルモデルの構築】

北村 (2012) はトップコーチのコーチング・メンタルモデルとして、「技能向上」、「意識形成」、「支援的環境設定」を挙げている。指導観には、根底となる前提的要素として、「指導環境」: 選手・チームの熟達度・施設・設備・指導スタッフ、「選手」: 個性・身体的成熟・認知的成熟、「指導者」: 個性・指導スタイル・指導経験、が存在しているとしている。そうした前提のもとに「技能向上」、「意識形成」、「支援的環境設定」という指導観が成り立っており、それによって「スキルの洗練化」、「選手・チームの自立」を促し、最終的に「本番でのパフォーマンス発揮」、「選手の人間的成长」を導く、とするモデルをトップコーチのコーチング・メンタルモデルとしている。しかしこの研究で GTA を用いて生成したとされているのは「技能向上」、「意識形成」、「支援的環境設定」という 3 つの指導観に関する項目のみであった。

そうしたことを踏まえ本研究においては、まず「指導者」: 個性・指導スタイル・指導経験、についての項目を [指導者の根底] としてカテゴリーグループを生成した。また指導観に関する項目を、どのようなことを念頭に置いて指導

に臨んでいるかという [指導理念] と、選手に対してどういった発話を行っているのかという [具体的指導行動] という 2 つに分けてカテゴリーグループを生成した。さらに「スキルの洗練化」、「選手・チームの自立」、「本番でのパフォーマンス発揮」という項目を、競技スポーツとして勝利を志向していくなかで目指されていると考えられるものとして [勝負強さの涵養] というカテゴリーグループを生成した。そして、「選手の人間的成长」という項目を、最終的に指導者が指導を通して競技力向上以上に涵養しようとしていると考えられるものとして [育成したい人物像] というカテゴリーグループを生成した。北村の研究においては、分析対象としたのは直接指導に関する部分のみであったが、本研究においてはそうした指導観がどのような経験や過程を経て成り立っているのかという [指導者の根底] 部分にも焦点を当てることができた。それにより、より包括的に指導者の持つ知に迫ることができたのではないかと考えられる。

以下では、各カテゴリーグループごとに考察してゆくこととする。なお、本研究は包括的モデルを提示することに主眼が置かれているため、それぞれに関する代表的な〈カテゴリー〉と『概念』およびその「語り」を例示しており、すべてを提示することはできない。それらのより詳細な検討は、稿を改めることとする。

1) [指導者の根底] に関して

このカテゴリーグループは、〈指導者を目指すきっかけ〉、〈指導開始当初の葛藤と気付き〉、〈指導哲学〉の 3 つのカテゴリーによって構成されているが、ここでは指導者の根底にあると考えられる〈指導哲学〉を例示しながら考察する。

〈指導者を目指すきっかけ〉を指導者にとっての出発点とし、〈就任当初の葛藤と気付き〉といった葛藤を経て、指導者はそれぞれに特徴的な〈指導哲学〉を構築していくと考えられる。Gilbert and Trudel (2005) は、「優れた指導者は指導経験を積むほど、他のコーチや環境を通じた学びよりもむしろ、自分自身の内省を重視するようになる」としているが、例えば指導者 D の「だからやっぱりダメなのは、失敗から学べない人。これは本当の意味でバカだよ。それからもっとダメな人は、失敗をしないように、って、チャレンジしないこと。でも失敗から学んで変わっていける人は、人生も同じように変わってけると思う。そういう位置付けで、俺も子ども達には言うし、俺自身もそうやって生きてきたからさ (D)」といった「語り」や、「その都度さ、勝てなかったって現実から、なんで勝てないのかって分析して、んでそれじゃ今度どうするかって改善をして、ほんで実行するってサイクルで。大体そうだった。だから負けちゃったこ

とは…結果が出てしまえば僕らの勝負はしょうがないんで、結果が出たところで、次の結果を変えるためにね、そこでどういう…チェンジをするか。そういうことを繰り返しやってきたもんで。一番大事なことは失敗をしないことではなくてさ。失敗してもいいから自分で行動を起こしてみても、その失敗から学ぶことだよ。失敗することはいくらでもあるけど、挑戦をしないで失敗するよりも挑戦して失敗した方が、選手も俺も納得できるんだよ (D)」といった「語り」から、『挑戦しない失敗より挑戦して失敗 (D)』という概念が生成された。こうした語りからみられるように、挑戦をし、その結果について自分自身の内省を深めて次へ繋げていくというプロセスを経て、自身を高めていると考えられる。

また、指導者 E の『俺はこうやってきたから、それはこうだよ』っていうのは、ない。自分には選手としての、確固たるベースがないから、勉強しながら一つずつ積み上げて、あーでもないこうでもないって、頭の中でやってきたバレーだから (E)」といった語りや、「全部自分で勉強するしかないんですよ。ってことはつまり変わっていくんですよ、その時その時で、勉強するってことが、その時にいいなって思ったことを取り入れていくからね (E)」といった語りから、『指導者自身が勉強 (E)』という概念が生成された。Currie et al (2012) は「学び続ける姿勢」がアメリカのオリンピック代表コーチの 5 つの心理的特徴の中で最も重要であるとしていることから、学び続ける姿勢は指導者にとって共通して大切なものであると言える。さらに結城 (2011) が、「対象となる選手に合わせて自分の形を柔軟にいかようにも変えうる可変性」の必要性を挙げていることから、選手に応じてある程度柔軟に指導を変えていく姿勢も、指導者にとって大切なものであると考えられる。

2) [指導理念] に関して

このカテゴリーグループは、〈選手を取り巻く環境作り〉、〈強制と自主〉、〈個性の涵養〉の 3 つのカテゴリーによって構成されているが、ここでは多くの指導者が言及していた〈選手を取り巻く環境作り〉を例示しながら考察する。

〈選手を取り巻く環境作り〉について、「目標がしっかりしていて、でそういう厳しい環境を、もう入学当時から肌で感じる環境でやってる子ってのは、そういうのが当たり前になるんですよ。だからいかにその厳しい環境を当たり前だと思ってさせるかってのが、指導者としては大事なんです (C)」といった語りから『厳しいことを当たり前だと思う環境 (C, D)』という概念が、「僕は、まずそういう環境作りをしてあげることが大事だと思ってます。中学校の指導者との関係だったりとか、

あるいは小学校中学校の子たちがうちに来たいなと思わせるような雰囲気作りをすることも必要だろうし、学校内でいろんな先生との関係作りも必要だろうしね。例えば進路をお願いするのだって、結局は信頼関係、人間関係だからね、そういう意味でもマネジメント力ってのはすごく大事だなんていう風に思いますね (E)」といった語りから『包括的な環境 (C, D, E)』という概念がそれぞれ生成された。選手の練習場面での意識に関する環境と、保護者や学校からの支援や進路などの環境、という 2 側面における環境を整えることが重要であるということが示された。北村 (2004) においても①心的支援、②環境設定からなる『支援』というカテゴリーが生成されており、それぞれ「選手が厳しい継続的な構造的練習に打ち込めるよう、心理的・物的・状況的な環境を常に最良の状態に維持する重要性」、「選手と競技との直接のおよび間接的な繋がり全体を支える指導的関わり」が必要であるとされているように、「厳しい環境を当たり前だと思ってさせるかってのが、指導者としては大事なんだよ (C)」といった環境と、「選手を集めてきて、でそれを指導する環境を作って、進路の面倒見てやる環境作ってっていうような…いわばトータルで良い環境 (E)」といった環境の、両面を整えていくことが重要であると考えられる。

3) [具体的指導行動] に関して

このカテゴリーグループは、〈技能の習得〉、〈相互の関わり〉、〈状況への対応〉の 3 つのカテゴリーによって構成されているが、ここでは指導者の教え方が顕著に表れる〈技能の習得〉を例示しながら考察する。

Lyle (2002) は、「技能向上の要素においては、科学に基づいた指導を重視すると同時に、科学にこだわりすぎず、自身の感覚や直観にも価値を置くべきである」としている。これは科学的に正しいとされる客観的な動作を理解することの重要性とともに、自身の運動感覚に対する主観的な認識の重要性が説かれていると考えられる。『「こーゆうやり方もあるよ』って提示して、いろんな選択肢の中から、『あなた (選手) が自分でやりやすいのどれ?』って、探させるっていうのも、ひとつ、考え方の中では大事なことじゃないかなあって思ってるんだよ (B)」という語りから、『成長していくためのヒントを与える (B)』という概念が生成された。正しいとされることを教え込もうとするのではなく、選択肢を提示することで、選手自身が考えるためのきっかけを与えることの大切さがうかがえる。

また、諏訪 (2005, 2009, 2010) は一連の研究の中で、メタ認知的言語化という理論を提唱している。メタ認知的言語化理論とは、「身体の動きや体感をメタ認知的に

ことばにする試行が身体知を学習獲得するためのツールとして有効であるという理論」であり、自分の認知過程の認知である。それは「自分の身体で起こっている思考を『意識するフェーズ』と、それを『言語化するフェーズ』からなる」ものであり、「『感じたことを感じたままに、不完全でもいいからとりあえず』言語化という形で外化することが必要」であり、たとえ一時的に矛盾することを言葉にしたとしても、「俯瞰プロセスで（もしくは実際に身体を動かしたときに何らかの不整合が起き）将来的に捨て去られる運命にあるから大丈夫」だとされている。これらのことから考えられることは、指導者が外部観測的に観て正しいと思ったことであれ、科学的に客観的な正しい動作とされているものであれ、必ずしも学習者にとって最適なものであるとは限らないということである。学習者自らが、自身の主観的な感覚と対話しながら、技能を獲得していく必要があるということであろう。諏訪・西山（2009）が述べているように、「そもそも身体スキルに関して、普遍的に成り立つことと身体固有性に根ざすことは必ずしも一致した見解を得ることができるとは限らないもの」であり、「ゆえに学習者は、自己受容感覚と客観的視点とのギャップがあることを認識し、自分にとって何が必要な着眼点で何が不要な着眼点なのかを、自らの責任において模索していかなくてはならない」のである。その意味においては、「自分で考えながらやってみて、自分でどれが良かったかわからないとダメだから (B)」といった語りや「自分で具体的に言葉に出せるようにしたりっていう、そういう訓練はちょこちょこしていかないといけない (B)」という語りに見られるような姿勢は、選手の〈技能の習得〉にとって非常に重要なあり方であると考えられる。

こうしたことから、選手に考えさせるためのヒントを与えることや、感覚についての共感的確かな示唆は、選手の運動感覚に潜り込むことによって可能になると考えられる。生田・北村（2011）は「選手経験や指導経験の内省を通じた知識の洗練化や、選手と感覚を共有するためのしかけが前提となっている」と述べており、指導者がこれまで培ってきた内面知としての身体知および経験知は、感覚を捉えて的確に選手と関わっていくために重要な要素であると考えられる。

4) [勝負強さの涵養] に関して

このカテゴリーグループは、〈勝負の場面での心のありよう〉、〈勝負強さの源泉〉の2つのカテゴリーによって構成されているが、ここでは指導者がどのように選手を洞察しているかが垣間見える〈勝負強さの源泉〉を例示しながら考察する。

〈勝負強さの源泉〉に関して、「かなり苦しいところま

で追い込んだ人間ってのは、それよりも苦しくない場面であれば、あんまり動じなくなってくる (A)」、 「なんていうかな…『我慢』が大事なのかな。レシーブの繋ぎにしたってなんだって、我慢できるかってことが大事…なんじゃないかなって思ってるんだよね。辛いときに我慢する自分をどれだけ作っていけるかっていうかさ (B)」といった語りから、『我慢強さ (A,B)』という概念が、「勝負勘っていうのは、教えるもんじゃなくて、その子が持っている、今までその子が経験してきた、小学校だとか、中学校だとかから、やっぱり、経験してきたことが、基本になっていると思うんですよ (C)」、 「それじゃうちはなんで勝負強いかっていうと…絞られてるってこと、そういうシーンをたくさん練習してるってこと、それから、接戦に負けるなって言われてること。まあそういうことの積み重ねだよ。それが結局勝負強さっていう形になって、周りの目に映るんだと思うんだよ (D)」といった語りから、『経験の積み重ね (C, ☒)』という概念が見出された。指導者Aの「かなり苦しいところまで追い込んだ人間ってのは、それよりも苦しくない場面であれば、あんまり動じなくなってくる (A)」といった「語り」にあるような考え方というのは、フロー理論を提唱しているチクセントミハイ（1975）によってフロー状態の前提的要素として挙げられている2つのうちの「①挑戦と能力のバランス」に繋がる部分ではないかと考えられる。すなわち、自分が現在持っている能力以上のことを指導者に求められることによって困難なことに挑戦し、それを克服することで『我慢強さ (A, B)』を身につけるとともにさらなる挑戦の水準に自己を高め、勝負の場面で実力を発揮するために必要な前提的要素を獲得していくと考えられるのである。また、指導者Dの「絞られてるってこと、そういうシーンをたくさん練習してるってこと、それから『接戦に負けるな』って言われてること。まあそういうことの積み重ねだよ (D)」といった「語り」に見られるような、厳しい場面においても、勝利という明確な目標に対して何をなすべきかを常に考えさせられるといった状況は、実力を発揮するために必要な「②明瞭な目標とフィードバック」という前提的要素の獲得に寄与しているものと考えられる。

5) [育成したい人物像] に関して

このカテゴリーグループは、指導者それぞれに特有の5つのカテゴリーによって構成されており、それぞれ〈他人との比較ではなく、自分との戦いによって自己充実感を得る人物 (A)〉、〈感動を与えられる人物 (B)〉、〈自信を持って自己主張することができる人物 (C)〉、〈バレーが終わってからの人生をたくましく生きることの出来る、考動力ある人物 (D)〉、〈人のことが考えられる

人物 (E) 〉であった。なお、指導者 D の「考動力」という表現は、「自ら考えて動く力」を表現したものである。

これらのカテゴリーを構成する概念として、『人間的成長すなわち勝利 (A, B)』、『バレーが終わってからの人生を生き抜くための人間力 (D)』、『勝ち負けに関係なく残るもの (E)』などが挙げられる。こうしたことから指導者は、単に競技の指導というだけでなく、選手の人間的成長を念頭して指導にあたっていることが分かる。中学高校年代のジュニア期の優れた指導者を対象とした石井 (1994, 1995, 1996) の研究においても、「人間的成長」が重視されている。そこでは練習に取り組む姿勢の重要性が強調されると同時に、選手の人間的成長を重視した指導理念の構造が報告されており、勝ち負けに依らない選手の涵養が重要であるといえるであろう。

VI. 結 論

本研究の結果、高等学校男子バレーボール指導者の包括的コーチング・メンタルモデルが構築され、指導者はこれまでの経験的な知の総体としての [指導者の根底] をベースに独自の [指導理念] を創造し、それらに基づいた [具体的指導行動] を選択することで勝利を志向した [勝負強さの涵養] を標榜し、最終的に指導者個別具体の [育成したい人物像] へと導くことを念頭して指導に臨んでいる、ということが明らかとなった。

本研究では男子チームの指導者に焦点を当てて調査をしたが、女子チームの指導者に対しても同様の調査を行い、指導対象者の男女における指導の違いを明らかにしていくことが必要であろう。さらに可能であれば、男性指導者のみならず女性指導者についても調査を行い、男性指導者と女性指導者の違いについても検討していきたい。また今後は全体的なモデルを基盤に、指導者の個別具体性に富んだ『概念』を丁寧に取り上げ、「語り」とともに詳細に検討していくことで、全てのコーチング実践者に経験知としての知の共有をもたらすことが可能になるのではないかという展望を述べて、本研究の結語とする。

VII. 付 記

なお、本研究は大東文化大学大学院修士論文、「バレーボール指導者の持つ暗黙知に関する探索的研究 - コーチング・メンタルモデル構築による接近と M-GTA の限界 -」(野口, 2012) の一部を再構成したものである。

VIII. 参考文献

- Benner Patricia and Wrubel Judith. (1989) The Primacy of Caring. Stress and Coping in Health and Illness : Addison-Wesley Publishing Company.
- Côté J. Salmela J. Trudel P. Baria A. and Russell S. (1995) The coaching model : A grounded assessment of expert gymnastic coaches' knowledge : Journal of Sport and Exercise Psychology (17) : 1-17.
- Csikszentmihalyi, M (1975) Beyond boredom and anxiety. San Francisco : Jossey-Bass : (チクセントミハイ, 2000. M. 今村浩明(訳). 楽しみの社会学 新思索社).
- Currie JL et al (2012) Reflection on a dream : towards an understanding of factors Olympic coaches attribute to their success. Reflecting Practice : 1-14.
- Flick, U : 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子 (訳) (2002) 質的研究入門 <人間科学>のための方法論. 春秋社.
- Gilbert, W. D. and Trudel, P. (2005) Role of the coach-How model youth team sport coaches frame their roles-. Sport Psychologist, 18 : 21-43.
- 生田久美子・北村勝朗 (2011) わざ言語・感覚の共有を通じた学びへ. 慶應義塾大学出版会.
- 石井源信 (1994) ジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究-ジュニア期における優秀指導者の実態に関する調査研究-日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告, 10-40.
- 石井源信 (1995) ジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究-ジュニア期における優秀指導者の実態に関する調査研究-日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告, 5-50.
- 石井源信 (1996) ジュニア期のメンタルマネジメントに関する研究 (第3報) -ジュニア期における優秀指導者の実態に関する調査研究-追跡面接調査の結果をもとにして-日本オリンピック委員会スポーツ医・科学研究報告, 3-24.
- Johnson-Laird, P. N. : 海保博之監修 (1988) メンタルモデル-言語・推論・意味の認知科学. 産業図書, 23-25.
- 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践-質的研究への誘い-. 弘文堂.
- 北村勝朗 (2004) 「教育情報」の視点による「コーチング」論再考-ブラジル・プロフェッショナル・サッカー指導者の指導実践を対象として. 教育情報学研究, 71-80.
- 北村勝朗・斉藤茂・永山貴洋 (2005) 優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか? -質的分析におけるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築. スポーツ心理学研究, 32 : 1 : 17-28.
- 北村勝朗 (2012) トップアスリートを指導するコーチの心理. 体育の科学, 62 : 8 : 581-585.

-
- 鯨岡峻 (1999) 関係発達論の構築. ミネルヴァ書房.
 - Lyle J (2002) Sport Coaching Concepts. A Framework for Coaches Behavior, Routledge.
 - 野口将秀 (2012) バレーボール指導者の持つ暗黙知に関する探索的研究-コーチング・メンタルモデル構築による接近とM-GTAの限界-大東文化大学大学院スポーツ・健康科学研究科修士論文.
 - 大崎正留 (2007) 暗黙知を理解する. 東京経済大学人文自然科学論集, 127 : 21-39.
 - Polanyi, Michael (1996) The Tacit Dimension. London, Routledge & Kegan Paul 4-5.
 - 諏訪正樹 (2005) 身体知獲得のツールとしてのメタ認知的言語化. 人工知能学会誌 : 20 : 5 : 525-532.
 - 諏訪正樹・西山武繁 (2009) アスリートが「身体を考える」ことの意味. 身体知研究会(人工知能学会第2種研究会), SIG-SKL-03-04 : 19-24 .
 - 諏訪正樹・赤石智哉 (2010) 身体スキル探究とデザインの術. 認知科学, 17 : 3 : 417-429.
 - 結城匡啓 (2011) 私の考えるコーチング論 - 科学的コーチング実践を目指して -. コーチング学研究, 25 : 13-20.
-